

『2013 年 2 月 2 日 - 3 日 飯舘村「農学における情報利用ゼミナール」 聴講レポート』

W 大学からの参加者

◆福島への訪問は今回で既に 10 回目超、飯舘村内に冬季は初。

初日は相当温暖な天候でありましたが、二日目については山間地特有の風が強く気温も低い天候を身をもって体感しました。特に初日の高温で一度融雪した積雪が翌日の低温で再度表層が凍結している箇所も多く、日陰などでは正午前後でも凍結した箇所も多く見られました。

◆脱輪の復旧方法について

一般的な感覚ではまずは雪から掘り出すというのが普通に思われたが、側溝のような場所では逆に大量にある雪を各種部材と併せて土台として脱輪箇所の前後の側溝に埋めて固めていくという方策が意外に有効と確認。





◆放射線測定モニタリングポストのシステムについて

村内のライブカメラについての存在は知っていたが、そのシステムの形態や電源・通信手段をどう確保しているのか、という点について現地の状況を踏まえて見る事が出来た。

前の印象としては降雪のあるという気候から太陽光発電関係はやや不適ではないのかと思っていましたが、やはりバッテリーが完備されている上に人の管理があることで電源の維持が確実化されており、通信についても既存通信会社の回線以外にも無線 LAN と Bluetooth のように複数手法で配したネットワーク網が独自に構築されているという点は、私自身も無線の従事者資格を持っていることもあり大変興味をもちました。





◆釣りについて

お教え頂いた場所で実施。(詳細は写真)

地形を見る限り、対岸側の窪み状の辺りは流れを直接受けることがないために魚類にとっての格好の居場所になっていると推測されたが、川幅が予想よりもあったこと、また対岸の樹木の枝が相当此方側にせり出している関係で、体制や釣竿の向けの工夫にもかかわらず釣竿を思うように伸ばすことができていなかった様子でした。





◆非常に頭に残っているフレーズは『皆が被災者』という言葉。

どうも東京などにいるとどうの一昨年の出来事で既に収束したと思わざるをえない空気を蔓延しているに近い状況にある一方で、こちらではつい一昨年に起きた出来事として現在進行形であるという実態は確かに感じられました。

しかしながら、実際の原発災害という発端を見た場合、普通の自然災害とは違ってその起きた場所に影響が留まらないこと、そしてその影響の範囲も実際のところは「目に見えない」というのが実際の状況だと思われ、そういう意味で、単に”福島”や”東北”という括りで一概に見る、極端に言えば区切るという一般的にはごく当たり前のように受け入れており、我々もついそれが当然と思ってしまう考え方が果たして本当の”復興”という流れを進める上で妥当なのだろうか、という疑問を再度問いかけられたと思っています。

その中でこの先の何年このような状況が続くかさえ判然としない中、無意識に進みつつある記憶・意識の固定化についてどう対処していくことも、単なる技術的な側面での対処に限らず、また同時に求められていくことではないかと思われました。



以上になります。

P.S 大幅に遅れてしまったため、レポートというよりは抜粋した写真集と言うのが適切かもしれません・・・。